山本　雅代教授年譜・著作目録・活動業績など

ー年　　譜ー

学歴

1970 年 4 月　獨協大学外国語学部英語学科　入学
1974 年 3 月　獨協大学外国語学部英語学科　卒業
1979 年 9 月　アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市・ハワイ大学マノア校・大学院「第 2 言語としての英語学」研究科修士課程　入学
1981 年 8 月　アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市・ハワイ大学マノア校・大学院「第 2 言語としての英語学」研究科修士課程　修了
1995 年 4 月　国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程　入学
2000 年 4 月　国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程　修了

職歴

1982 年 4 月　帝塚山短期大学・近畿大学・同志社大学・大阪産業大学等にて兼任講師（1990 年 3 月まで）
1990 年 4 月　芦屋大学教育学部助教授（1994 年 3 月まで）
1994 年 4 月　桃山学院大学文学部助教授・教授（2000 年 3 月まで）
2000 年 4 月　関西学院大学商学部教授
2010 年 4 月　関西学院大学国際学部教授

学内活動

2000 年11月　関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科修士課程指導教授（専任）（研究演習 M マル号）
2002 年 8 月　関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士課程後期指導教授（専任）（研究演習 D マル号）
2010 年 4 月　関西学院大学国際学部国際学科（専任）（国際地域理解入門 A、国際学入門、社会言語学基礎、基礎演習 A、基礎演習 B、グローバル化と言語、バイリンガリズム、研究演習Ⅰ、研究演習Ⅱ）

学会活動（おもな所属学会および役職）

1979 年 6 月～1997 年12月　全国語学教師協会（現 全国語学教育学会）会員
1982 年 4 月～1995 年　Teachers of English to Speakers of Other Languages 会員
1983 年 3 月～2005 年 3 月　大学英語教育学会会員
1985 年 9 月～1994 年10月　全国語学教育学会「バイリンガリズム・コロキアム」コーディネーター
1991 年 3 月～　異文化間教育学会会員
1994 年 8 月～1998 年 5 月　日本教育心理学会会員
1995 年 7 月～　全国語学教育学会「バイリンガリズム研究部会」紀要 *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism* 編集委員

1996 年 1 月～1997 年12月	全国語学教育学会学会誌『*The Language Teacher*』Editorial Advisory Board Reviewer
1998 年 2 月～	社会言語科学学会会員
2000 年 5 月～2002 年 4 月	大学英語教育学会関西支部研究企画委員
2001 年 3 月～	Editorial Board, *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*（Clevedon, England : Multilingual Matters、現在は Taylor & Francis）の編集委員
2001 年12月～2003 年 6 月	異文化間教育学会紀要編集委員会常任委員
2003 年 6 月～2005 年 5 月	異文化間教育学会理事
2003 年 6 月～2005 年 5 月	異文化間教育学会広報・情報化委員
2004 年 4 月～2008 年 3 月	日本子ども学会会員
2004 年12月～2008 年 3 月	言語科学会会員
2005 年 6 月～2009 年 5 月	異文化間教育学会常任理事
2005 年 6 月～2007 年 5 月	異文化間教育学会研究委員会委員長
2009 年10月～2011 年10月	第 1 言語としてのバイリンガリズム研究会代表
2011 年10月～2019 年 3 月	第 1 言語としてのバイリンガリズム研究会会長
2013 年 6 月～	異文化間教育学会理事
2013 年 6 月～2016 年 6 月	異文化間教育学会異文化間教育体系編集委員
2015 年 4 月～2018 年 3 月	関西学院大学・特定プロジェクト研究センター「手話言語研究センター」センター長
2016 年 4 月～2019 年 3 月	日本財団の助成金を受けて運営されるセンターとして活動を開始した「手話言語研究センター」センター長
2019 年 4 月～	上記「手話言語研究センター」研究員

－主要業績－

主要著書

1．山本雅代『バイリンガル（2 言語使用者）：――その実像と問題点――』大修館書店、1991 年
2．山本雅代『バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか』明石書店、1996 年
3．Edited by Mary Goebel Noguchi and Sandra Fotos『*Studies in Japanese Bilingualism*』Multilingual Matters、2001 年「Japanese Attitudes Towards Bilingualism : A Survey and Its Implications」担当
4．Masayo Yamamoto『*Language use in interlingual families : A Japanese-English sociolinguistic study*』Multilingual Matters、2001 年
5．成田　一編『大阪大学新世紀レクチャー 英語リフレッシュ講座』大阪大学出版会、2008 年「バイリンガルの言語習得が示唆するもの」担当
6．小島　勝編著『異文化間教育学の研究』ナカニシヤ出版、2008 年「異言語間教育――真なる多言語共生社会の創出を志向する教育」担当
7．西原鈴子編『言語と社会・教育』朝倉書店、2010 年「バイリンガリズム：モノリンガル的視点からの脱却」担当
8．山本雅代編著；井狩幸男，田浦秀幸，難波和彦著『バイリンガリズム入門』大修館書店、2014 年
9．山本雅代、馬渕　仁、塘　利枝子編著『異文化間教育学体系』明石書店、2016 年「第 3 巻 異文化間教育の捉え直し」担当

10. 日本児童研究所編；山本雅代、望月登志子、長谷川真理、白佐俊憲ほか著『児童心理学の進歩 2006 年度版』金子書房、2006 年「バイリンガルの言語習得」担当
11. 河野守夫編集主幹；井狩幸男ほか、編集委員『ことばと認知のしくみ』三省堂、2007 年「バイリンガルの言語習得と喪失」担当

論文

1．「バイリンガル考」『国際結婚を考える会会報』35 号、1981 年
2．「Sign language in ESOL」『*JALT Journal*』6 巻第 1 号、1981 年
3．「Significant factors for raising children bilingually in Japan」『*The Language Teacher*』第 11 巻 10 号、1987 年
4．「Connotative differences between foreign and Japanese English teachers in Japan」『*Journal of Multilingual and Multicultural Development*』第 10 巻 3 号、1989 年
5．「Independent reading in English――Use of graded readers in the library English as a second language corner」『*Reading in a Foreign Language*』第 6 巻　2 号、1990 年
6．「バイリンガリズムと誤解」『月刊言語』第 20 巻 8 号、1991 年
7．「Linguistic environments of bilingual families in Japan」『*The Language Teacher*』第 16 巻 5 号、1992 年
8．「母語教育――少数言語母語話者の母語保持・伸長教育」『*The Language Teacher*』第 18 巻 4 号、1994 年
9．「バイリンガルの意味記憶貯蔵――その初期形態についての一考察」『英米評論』第 9 号、1994 年
10. 「Bilingualism in international families」『*Journal of Multilingual and Multicultural Development*』第 16 巻 1・2 号、1995 年
11. 「A brief history of Japanese official policies of Ainu segregation and assimilation, with a focus on language policy」『総合研究所紀要』第 22 巻 1 号、1996 年
12. 「A survey on perception of “bilinguals”――What the results imply」『*The Japanese Journal of Language in Society*』第 1 巻 1 号、1998 年
13. 「Bilingual families with children in Japan」『*The AILA Newsletter*』第 1 巻 3 号、1999 年
14. 「Does the “one parent-one language” principle work?」『*Educational Studies*／教育研究』第 43 巻、2001 年
15. 「Language use in English-Japanese interlingual families in Hawaii――A pilot study」『総合研究所紀要』第 27 巻 1 号、2001 年
16. 「バイリンガルはどうやって作られる？」『チャイルドヘルス』第 38 巻、2001 年
17. 「Language use in families with parents of different native languages――An investigation of Japanese-non-English and Japanese-English families」『*Journal of Multilingual and Multicultural Development*』第 23 巻 6 号、2002 年
18. 「「マルチリンガリズムの力学モデル」――その特性、有用性と問題点」『商学論究』第 50 巻 1・2 号、2002 年
19. 「自画像としての「単一民族単一言語国家」――民族存在の不可視化と言語的同化」『商学論究』第 50 巻 4 号、2003 年
20. 「What makes who choose what language to whom?――Language use in Japanese-Filipino Interlingual families in Japan」『*International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*』第 8 巻 6 号、2005 年

21. 「複数の言語と文化が交叉するところ――「異言語間家族学」への一考察」『異文化間教育』第 26 号、2007 年
22. 「Language use in interlingual families――Do different languages make a difference?」『*International Journal of the Sociology of Language*』第 189 巻、2008 年
23. 「言語としての「手話」――言語学におけるその位置づけ」『商学論究』第 57 巻 2 号、2009 年
24. 「バイリンガル幼児――「受容バイリンガル」はどのように言語を使用しているか」『日本語学』（11 月臨時増刊号）第 29 巻第 14 号、2010 年
25. 「手話はいかに捉えられているか：大学生を対象とした調査から」『言語と文化』第 14 号、2011 年
26. 「バイリンガルの子どもの言語獲得・発達」『チャイルド・サイエンス』第 9 巻、2013 年
27. 「受容バイリンガルの言語使用」『言語と文化』第 16 巻、2013 年
28. 「「日本語－フィリピン諸語」異言語間家族の言語使用状況：「言語の威信性」を枠組みに」『国際学研究』第 2 巻第 1 号、2013 年
29. 「Code-switching accounted for by Relevance Theory」『総合政策研究』第 44 巻、2013 年
30. 「受容バイリンガルの言語使用と言語環境：母親の言語使用の経年変化に焦点を絞って」『*Language and Culture*』第 20 巻、2015 年
31. 「デフォルトとしてのバイリンガリズム」『異文化間教育のとらえ直し』第 3 巻、2016 年

学会発表

1. An analysis of the effects of the linguistic environments on the language acquisition of one bilingual child、全国語学教師協会地区大会、1983 年
2. 幼児バイリンガルにおける言語選択、第 9 回国際基督教大学言語社会学研究会、1983 年
3. Language acquisition of one bilingual child、第 9 回全国語学教師協会国際大会、1983 年
4. The bilingual child、全国語学教師協会支部研究会、1984 年
5. 日本のバイリンガル達――アンケート調査による英語－日本語バイリンガルの言語環境考察、第 10 回国際基督教大学言語社会学研究会、1984 年
6. Bilingualism in Japan――Survey on linguistic environments of English-Japanese bilinguals、第 10 回全国語学教師協会国際大会、1984 年
7. Unified language period、第 1 回バイリンガリズム・シンポジウム、1985 年
8. Bilingualism in Japan、全国語学教育学会支部研究会、1990 年
9. Roundtable on extensive reading、第 16 回全国語学教育学会国際大会、1990 年
10. Bilingualism、全国語学教育学会支部研究会、1991 年
11. Workshop on bilingualism、全国語学教育学会支部研究会、1991 年
12. Bilingualism and misconceptions、全国語学教育学会支部研究会、1991 年
13. Bilingualism in Japan、全国語学教育学会支部研究会、1992 年
14. 国際結婚家庭とバイリンガリズム――その言語環境の実態とバイリンガリズム観、異文化間教育学会　第 13 回大会報告、1992 年
15. Workshop on bilingualism、全国語学教育学会支部研究会、1992 年
16. Bilingualism in a theoretical framework、全国語学教育学会支部研究会、1992 年
17. バイリンガリズムとその育て方について、全国語学教育学会支部研究会、1993 年
18. バイリンガルの言語選択、大学英語教育学会関西支部、談話分析研究会　第 5 回研究会、1993 年
19. Typology of language usage among core members of bilingual families、全国語学教育学会東京地区大会、1993 年

20. バイリンガリズム入門、*Symposium on Second Language Acquisition Through Content Based Study : Introduction to Immersion Education*、1994 年
21. バイリンガリズムの研究方法――言語習得の視点から（Research methods in bilingualism : From the viewpoint of language acquisition）、大学英語教育学会　第 33 回全国大会、1994 年
22. 潜在バイリンガリズムから顕在バイリンガリズムへ――2 言語習得を促す要因考察、日本教育心理学会　第 36 回総会シンポジウム、1994 年
23. 幼児同時バイリンガルの言語混合現象――その解釈、桃山学院大学人間科学会研究会、1994 年
24. 「バイリンガル」に対する大学生の意識調査、大学英語教育学会　第 34 回大会、1995 年
25. 2 つの異言語環境を持つ子供たち――学校の役割、日本幼少児健康教育学会　第 14 回大会、1996 年
26. 日本のバイリンガル教育／イマージョン教育、異文化間教育学会　第 18 回大会／ラウンド・テーブル、1997 年
27. Survey results on university students' perception of "bilinguals"――Attitudes and implications、*The 3rd Pacific Second Language Research Forum/Symposium on Bilingualism*、1998 年
28. 日本の現状を踏まえたバイリンガル教育――開発、実施への模索、異文化間教育学会　第 19 回大会／ラウンド・テーブル、1998 年
29. Contrastive study of the effect of minority language prestige on language use in interlingual families、第 12 回国際応用言語学会（AILA）世界大会（東京）、1999 年
30. How can we help children to be bilingual?、第 12 回国際応用言語学会（AILA）世界大会（東京）、1999 年
31. バイリンガル――その評価における二極分化の兆候、JACET 関西支部談話会、2000 年
32. 「一人一言語使用」――バイリンガル能力顕在化への王道か？、JACET 関西支部リーディング研究会・SLA 研究会　第 1 回合同研究会、2000 年
33. 「日本語－非英語」家庭の言語使用――「日本語－英語」家庭との比較から、社会言語科学会　第 8 回研究発表大会、2001 年
34. 潜在的多言語家庭の言語使用――日本－フィリピン家庭への面接調査から、社会言語科学会　第 14 回研究発表大会、2004 年
35. 多言語を背景とする子どもの言語習得――思い込みと誤解、第 2 回子ども学会議、2005 年
36. バイリンガル獲得の示唆する英語教育、第 2 回英語教育総合研究会、2006 年
37. バイリンガルの習得から見た小学英語教育、第 5 回英語教育総合研究会：公開シンポジウム「小学英語教育はいかにあるべきか」、2007 年
38. 国際結婚家族の言語――子どもはみなバイリンガルになるか？、異言語間・異文化間家族学研究会：公開シンポジウム「複数の言語と文化の交叉点：国際結婚家族の現在と未来」、2007 年
39. 日本でバイリンガルを育てるには／Raising Bilingual Children in Japan、フェリス女学院大学・英文学会招待講演、2009 年
40. 第 1 言語としてのバイリンガリズム：2 つの言語を同時に習得する子どもたち／Bilingualism as a First Language : Children acquiring two languages simultaneously、同志社大学大学院文学研究科・英文学・英語学専攻大学院コロキアム、2010 年
41. 私たちはなぜ『第 1 言語としてのバイリンガリズム』を研究するのか？、「第 1 言語としてのバイリンガリズム研究会」第 4 回研究会、2011 年
42. 受容バイリンガル：「話す」ことはバイリンガルの必要条件か、大阪女学院大学　国際共生研究所主催招待講演会、2012 年

43. バイリンガルの子どもに学ぶ：言語獲得・発達研究の魅力、同志社大学英文学会　2013 年度年次大会、2013 年
44. 私たちはなぜ『第 1 言語としてのバイリンガリズム』を研究するのか？、「第 1 言語としてのバイリンガリズム研究会」第 9 回研究会、2014 年
45. 異言語間家族に育つ子どものバイリンガリズム――社会と家庭を考察の枠組みに考える、子どもの日本語教育研究会　第 1 回研究会招待講演、2016 年
46. 異言語間家族のバイリンガリズム：D ちゃんとお母さんは何語で話している？、第 3 回講演会連続講演会「先の見えない現在（今）～人、地域、文化、社会をつなぐ『ことば』を考える」招待講演、2017 年
47. Bilingualism in Japan、LINGUAPAX ASIA 2018 INTERNATIONAL SYMPOSIUM リングアパックス・アジア 2018 年国際シンポジウム、2018 年
48. 手話言語との出会い、第 18 回日本手話教育研究大会講演、2018 年
49. バイリンガリズム――異言語間家族の言語選択・使用――、ことばの科学（京都：立命館大学衣笠キャンパス）ゲストスピーカー特別講義、2018 年

外部資金研究

1．1995 年 4 月～1997 年 3 月　文部省科学研究費補助金による一般研究（C）（H 7-8）「国際結婚家庭における言語使用の実態――二言語使用の状況調査」研究代表者
2．1996 年 4 月～1999 年 3 月　文部省科学研究費補助金による基礎研究（A）（H 8-10）「異文化間教育の体系化に関する基礎的研究」研究分担者
3．2003 年 4 月～2005 年 3 月　文部省科学研究費補助金による萌芽研究（H 15-16）「国際結婚家庭における母語の使用と子への継承――日本語－非英語家庭の言語使用状況調査」研究代表者
4．2004 年 4 月～2007 年 3 月　文部省科学研究費補助金による基盤研究　（B）（H 16-18）「異文化間教育に関する横断的研究－共通のパラダイムを求めて」研究分担者
5．2009 年 4 月～2012 年 3 月　文部省科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（H 21-23）「同時バイリンガル幼児の言語発達研究」研究代表者
6．2012 年 4 月～2016 年 3 月　科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（H 24-27）「受容バイリンガル児の言語発達研究」研究代表者
7．2015 年 4 月～2019 年 3 月　科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（一般）（H 27-30）「受容バイリンガルの言語発達と言語使用」研究代表者

その他

1．1998 年 4 月～2001 年 3 月　桃山学院大学（情報化推進委員会ワーキンググループ 4）日本電信電話株式会社（当時）共同研究「少数言語を母語とする児童・生徒の母語保持・伸長教育－マルチメディア援用による遠隔母語教育実験」共同研究者
2．2007 年 10 月～2011 年 3 月　国立民族学博物館共同研究（研究代表者－庄司博史）「日本における移民言語の基礎的研究」共同研究者